

有森信二

授業に遅れず、こなしていくのがやつとの私にとつて、職員室が揺れる時間というのは、なんとも居心地のよくないものだった。

自分のクラスの松山が起こした事件であるというのに、意見をはさむ間も余裕もなく、延々と続く議論をただ聞いていただけだった。

「新任さん、あんまり考え込まないようにね。なんでも、前向きにとらえることですよ。ちよつとでも後ろを向くと、背中からどつと疲れが襲いかかりますから」

隣組の担任が、私の背中をポンと叩いた。

「県下でナンバーワンのK高校ですからね。教師も生徒も、そして後援会も。なあに、なにもかも時間が解決してくれますよ。いわば、選りすぐりのトップ集団です。問題解決にこと欠くことはありません。政治家も、役人も、医師も、マスコミも、警察も、弁護士も、社長も、学者も、なんだつて揃うんですよ。いざというときにはね」

確かにそうだった。後援会役員の人選が意図的になされているのかどうかはわからないが、地元の主立った顔ぶれが、殆ど名前を連ねていた。

群を抜いて学年のトップを走っていた松山が、学期始めから、先日の傷害事件で逮捕され隔離棟に入れられるまでの二月ほどの間、学級日誌を一人占めしていた時期があったが、彼のうんざりするくらい奇妙な内容の「持論」を、また読まされるのかと思うと、まともに向かい合う気になれなかった。

その日誌のタイトルを拾っていく。

真理とはなにか、経験則即ち現代科学は真の科学ではない、命というものの、どこから来てどこへ行くのか、死と愛への賛歌、いかにしてエゴイストは作られるか、真の宇宙を知ろう、などと、ホームルームの度に、松山から何度も聞かされた言葉が並んでいる。中程までめくっていくと、

「コスモスを知る」と太字で書かれたタイトルのページがある。以降のページは空白になっている。

「コスモス、即ち宇宙は、みんな一つであると思っていやしないか。勿論、究極の究極は一つであり、真理は一つではないか。」

ところが、宇宙は無数に存在する、といったら驚くだろうか。実際、無数、無限に存在するのだ。これは、たった今、真理は一つしかないといったことと矛盾するではないか、との詰問を受けよう。

しかし、宇宙は現に無数、無限に存在する。

ほら、そこにも、向こうにも、あちらにも、後ろにだって存在するのだ。君やぼくが今見ている宇宙。君やぼくが生まれる一瞬前の宇宙。君やぼくが死んだ後の宇宙。もともと、気が遠くなるほど時間が経過した後の宇宙。そんな宇宙が、時系列とともに新たに形成されていくのだと思ったら、大間違いだ。

元から、そこに、今、そのまま在る。

パラパラとページを繰る要領で、扉をぐり抜けさえすれば、アンドロメダ座大星雲にだって、オリオン座大星雲にだって、この宇宙の外にある隣の宇宙にだって、簡単に行き、戻ることができるんだ。

ある意味では、死ぬって方法でね。

だから、死んだらお仕舞いだ、なんてナンセンス。死ぬってことは、たった一枚の扉を越えて行くという、すごく単純なことなんだ。だから、死んだって、決してお仕舞いになりはしない。

勘違いしないでよ。自殺を勧めたりなんかしてるんじゃない。それに、星や、太陽や、人や、動物や、植物や、いやいや空の雲にだって命があるんだ。

こんな命が、いろんな生き方（いや、死に方といった方がいいのかな）をしながら、グルグル巡っている。三千年前のぼくから、今のぼくへ。今のぼくから、三億年後のぼくへ。二十億年後のぼくから、五千年前のぼくへ、という

具合にね。

ところが、それらもみんな今なのだっていうと、こんがらがってしまふかな。

真実は、始まりも終わりもない中で、無数、無限の宇宙が、規則正しく動いている。そう、宇宙のダンスだよ。

ぼくは、この宇宙の法則を研究し、証明しようとしている。ちゃんとした手掛かりを見つけたんだ。これは、大発見になる。いや、もともとそこにあるものを見つけるんだから、発見とはいわないのかな。

とにかく、宇宙って、どう説明したらいいのか。遠くて近くにある、高くて低くにある、っていう感じかな」

私は、後ずさりした。激しい喉の乾きを覚えた。多分、西日を遮るなものもない教室の明るさと温度が、私の神経を妙な具合に刺激したのだったろう。日誌を落とし、ふわりと膝から崩れていく自分の影を、間近に見た。

この日誌を書き付けた午後の帰宅途中、松山は急行電車内を逆走し、行き先が違うというのが分からないのか、と大声で叫びながら車掌に飛び掛かり、車掌の背中しにシャーペンシルの先を三度、力任せに突き立てたのだという。